

第Ⅴ部 縄文時代前期の諸問題

第1章 縄文時代前期土器群の細別

第1節 範型と様式

第一群土器の範型

北陸地方における縄文時代前期の土器群は極楽寺式（含繊維土器群）→朝日C式→福浦下層式→蛸ヶ森式→朝日下層式の各型式が設定されている〔高堀1966〕。富山県側でのこの型式設定の基礎は昭和26年頃、すでにほぼ体系化されていたと考えられる〔森1951〕。これを北陸という枠の中で更に体系化及び充実を図ったのが、山内清男博士を中心とする九学会連合の能登合同調査によることは周知の事実である^①〔高堀1957〕。その後、前期の研究はこれといった進展を見せなかったが、他地域との土器様相との比較並びに中期への土器変化の状況をふまえた小島俊彰の論文が提出された〔小島1968〕。この論攻には前期の研究史も総括的に述べられており、内容とあいまって高く評価される。この論攻では更に土器型式編年網の補足が試みられている。先の高堀編年に福浦上層式が加わり、他地域との相互関係もまとまりのあるスッキリとしたものとしている。

この様な状況下で、立山町吉峰遺跡並びに富山市小竹貝塚の発掘調査が実施され、かなり大量の資料増加を見たわけである。現在のところ資料の細部にわたる検討は為されていないが、予察という形で県内の前期土器群の範型を設定してみることにする。

北陸地方における縄文時代前期の土器群は、胎土内に植物繊維を含む群と含まない群に二大別できる。これは他地域の該期土器群の事情と全く一致する。この各土器群の変遷はほぼ一系のまま進められたものと考えられる。

さて、縄文時代前期に属す土器群は地域毎に若干のバリエーションを保ちながらも、ほぼ同一的な（いわゆる前期的な）顔付きを持って形づくられている。この状態を生む為の中心的地帯は従来、関東地方及び近畿地方と認められており、各地の土器群は少なくともそのいずれかの影響下で形成されたものと考えられている^②。

北陸地方の前期土器群は初頭から大略、近畿地方の影響下で形成された〔高堀1965〕。この様相は前期末葉で一変して、関東地方の影響を強く持ち出し中期へと持ち越されるものと考えられている〔小島1968〕。この各種土器型式形成上の大別は今のところもっとも妥当性のある考え方といえよう。

土器型式^③の分類は型式名が明確に打ち出されている割には明確性を欠いている。そこで従来から言われている事柄を参考にしながら範型を抽出してみることにする。

縄文時代前期の土器形式は二種に限られ、それぞれの種は口辺部の形状により更に二類に分類できる。

第一種は尖底の深鉢形土器で、平縁のものと四つの波状口縁を持つものに類別できる。第二種は平底の深鉢形土器で同じく二類に類別できる。これを前者から深鉢A₁・A₂、深鉢B₁・B₂と呼ぶことにする。この2種の土器形式によって、ほぼ前期全般の土器群が構成されており、この伝統は深鉢形土器を主体とする草創期、早期以来のものと理解される。この事情は前期中葉頃から新器種を加えるなど除々に変わると考えられるが、その新しい器種は、全体での占める位置が低いものと言い得よう。

前期の土器群は先に示したように合繊維土器群とそれを含まない群に二大別できる。記述の都合上、前者を前期第1群、後者を前期第2群として記述する。

前期第1群

前期第1群には、深鉢形土器A₁・A₂・B₁・B₂の全ての器種が認めらる。^⑤文様帯は関東撚系文系土器群とよく似た第1から第2までの文様帯を持つ個体が多い。器内面及び底部に縄文・貝殻条痕を施す個体も認められるがこの部位については文様の効果を持たないと判断したい。^⑥

さて、前期の土器群の文様はアナガラ属の貝殻腹縁や串状工具を押し引いて描く条痕文^⑦(表記はK)と縄文原体を回転押圧する縄文^⑧(表記はJ)と縄を押圧する押圧縄文(表記はO)と貝殻腹縁・半裁竹管及び刺突具を押したり引いたりして描く沈文^⑨(表記はC)、更に粘土紐^⑩を器面に張りつける隆起文(表記はR)そして無文(表記はM)の6種で構成される。この6種は前期以後、縄文時代各期にわたって支配的に採用された施文手法とみなせよう。

前期第1群の代表的遺跡である富山県極楽寺遺跡〔小島1965〕、石川県佐波遺跡〔橋本1966〕の出土資料を中心に各施文手法の体系を概観してみることにする。

両遺跡出土資料の範型は大略よく以ており、それは6つの範型に統轄できる。その型は第1から第3文様帯への各文様(先にあげた6種)の使いわけというかたちで具体的に示し得る。

K型—貝殻条痕がその大部分を占めており、他の文様と併用されることは少ない。文様帯の意識は条痕の方向を各文様帯ごとに変化させる程度にとどまる。個体数は少ないが、現在知り得る資料では他の文様と併用されることはなさそうである。条痕の文様効果は縦と横にはほぼ限られており、第3文様帯は無文となっている。器種はAが大部分を占めると考えられる。

J型—縄文のみで文様帯を構成する。縄文は一段・二段の原体が用いられているが、二段のものが多用される。又、第1文様帯と第2文様帯の区別はない。第3文様帯に二段の縄文

を回転押圧する個体が認められる。

縄文の効果は斜条を基本とし、羽状条が大部を占める。この羽状条の効果を生む手法には $LR \cdot RL$ の原体を交互に回転するものと、 LR あるいは RL 1 種を左右・斜めに回転させるものの 2 種が認められるが、前者が多用される。又、羽状条の効果は横の走行を持つものが大部を占めるが、まれに縦の走行を持つものが認められる。器種としては深鉢型 A_2 あるいは B_2 が多く、垂下張り付け文が多用される傾向にある。

JO型—第 1 文様帯には二段の縄文が回転押圧され、第 2 文様帯は無文地に対する一段の縄文の押圧で飾られる。J 型へ入れる考え方でもできるが、手法が特殊であるので一つの型と認定した。

器種は B_1 を取ると考えられる。

JM型—第 1 文様帯に縄文が施され、第 2 文様帯が無文になる型である。縄文の効果は斜条効果が多く、大部分が二段の縄文原体を横位に回転して施文する。

器種は全ての種類が認められるが、 $B_1 \cdot B_2$ が多いと考えたい。

JC型—第 1 文様帯は JM 型同様二段の縄文が回転押圧される。第 2 文様帯は無文地に篋状工具による連続刺突文を施すことによって飾られる。第 3 文様帯には二段の縄文を回転施文するものがあるが、その個体数は少ない。

第 2 文様帯には二段の縄文を回転施文するものがあるが、その個体数は少ない。

第 2 文様帯の文様効果は、口辺と平行に器体をめぐって施文される帯状効果と、綾杉状効果を持つものが認められる。

器種は不明確であるが、 B_1 のものが多いと考えたい。

MR型—無文地に隆起線を張り付け、それによって第 2 文様帯を生み出す型である。第 2 文様帯は山形効果及び帯状効果を持つものが多く、隆起線には刻みが付けられている。

器種は $A_1 \cdot B_1$ が多い。

以上が前期第 1 群の 6 つの型であるが、これがもっとも基本となる範型と考えられる。この各範型が全て同一時期に採用・使用されたと考えられるには若干の不合理がある。ここで他地域の編年学的な成果を参考に今一度各文様の内いくつかの地縁的な系譜をたどってみることにする。

貝殻条痕文は早期後半に関東・近畿両地方で集中的に採用された文様である。特に他の文様と併用されることは少なく、ほぼ単純に使用されることが多い。この性格は北陸前期第 1 群の内の K 型とよく似る〔橋本 1966 等〕と言えよう。前期前半にこの条痕文が残る例は近畿地方に認められるが、この場合その多くが他の文様と併用される。

JO 型の押圧縄文は関東地方の前期前半に多用される。この意味では花積下層式との類縁

性〔小島1965等〕は積極的に指示できる。

MR型は東海から中部地方にかけて分布する木島式に比定し得る〔小島1965等〕ことは異論のないところである。口辺部に付けられる垂下張付文もこの木島式の影響と理解できよう。

J C型の内、半裁竹管でいわゆる連続爪形文を付するものは畿内で多用された北白川下層式の範中で理解できる。アナグラ属の貝殻腹縁を利用した連続刺突も文様効果という点では先の北白川下層式との類縁性が指摘できる。

このように北陸前期第1群土器の文様のいくつかは他地域の文様的な「はやり」と対比すると早期後半から前期の内、2ないし3の時期にわたると考えることができる。これ自体が北陸前期第1群の時期的細別のヒントを与えているものと考えて差しつかえないだろう。

第1群土器の様式的区分

では次に先にかかげた6つの範型の時間的前後関係について推論を述べてみる。

石川県佐波遺跡のK型土器群は、縦位にしかも波形に付される条痕が認められる。この条痕文は近畿地方の早期後半の土器群（石山Ⅵ・Ⅷ式）と比定し得よう。更にこの遺跡からは東海地方の土器と類似した条痕文が認められる^⑩。多少の問題は残るが、このK型を早期後半に位置付ける論拠をここに得たい。

MR型及びJO型土器はその特徴より前期初頭に位置づけることは、大方の認めるところである。特にMR型は主体となるほど多く採用された型ではなく、むしろ東海地方から移入された個体と考えたい。この時期には当然主体を占めるJ型土器が採用されていたと考えられる。具体的には器壁内面に、ほぼ横位の貝殻状痕を持つものをあげたい。同じく内面に縄文を附すものもこの仲間に入りたいが、今のところ確証がない。貝殻条痕を内面に附す個体をこの時期に含めたのは、貝殻状痕そのものを早期の系統を引くものと考えた所にある。

この次の時期、すなわち関東でいえば関山式、近畿でいえば北白川下層Ⅰ式に相当する土器群はJM型・J C型及びJ型で内面に貝殻条痕を持たない範型が考えられる。傍証の根拠は第2文様帯の文様効果である。この効果は先にも示したように北白川下層Ⅰ式のものと類似する。その影響のもと、形成された型と認めてよいであろう。

この後の時期となると機械的には関東の黒浜式比定あるいは北白川下層Ⅱ式比定の土器群が考えられるはずである。従来は朝日下層式が比定されているが、ここに若干の問題が含まれている。朝日下層からは北白川下層Ⅱ式土器^⑪が発見されており、これとコンパス文を主文様とする個体は各々所属時期は違う（コンパス文は関東地方黒浜式比定）と考えられ従来の編年に加えられていた。しかし黒浜式比定土器には植物繊維の含有が無く、むしろ諸磯A式^⑫に比定せしめる方が妥当と考えられる。この場合搬入されたと考えられる北白川下層Ⅱ式の位置並びに地の土器との共存関係はスッキリまとまることになる。同地点からは他に繊維含

有土器が出土しているらしい^⑨。あるいはこの繊維土器が、その北白川下層Ⅱ式の古い部分と伴う土器群であるかもしれない。この辺の事情については更に後論の項で述べることにしたい。

北陸地方前期第1群土器は先に述べた考察が正しければ、2群に分割されることになる。更に、早期後半の1群並びに確証は持たないがもう1群（北白川下層Ⅰ式平行）を加えることができれば、早期から前期前半にかけて四つの時期設定が可能ということになる。まだ推論の域を出ないが、仮にこれを様式のわくで理解したい。この土器群はほぼ一系の系列を引くものと考えられるので古いものより、北陸含繊維系土器第1様式、第2様式、第3様式、第4様式（未確認）と仮称したい。第1様式は早期後半（K型のみ）、第2様式（MR型・JO型・J型）から以下第3様式（JC型・J型）、第4様式（J型？）までが前期前半にそれぞれ比定できると考えるわけである。

第2群土器の範型

前期第2群の土器形式も、その主体となるものは先にあげた深鉢形B₁・B₂に限られる。他に口縁が大きく内湾する浅鉢形土器も若干認められるが、今は実体が不明確であるため、触れないこととする。

前期第2群の範型は大きく5つにまとめることができる。文様帯の傾向は第1群とよく似るが、第3文様帯を持つものと持たないものには時間的な一線がひける。

先にあげた搬入土器と考えられる北白川下層Ⅱ式を含めて記述するが、外部からの搬入土器を土着の土器群と同一の型に入れるには、若干の不都合が認められる。しかし、たとえ土着の土器であっても、他地域の土器の影響を強く受けて成立したものが多いため、便宜的に同一の型で一応把握することにしたい。更に、このような関係は、先にあげた関東系の土器群にも認められる。これらも型としては同一に含めるが、実際の記述にあたっては、関東系（黒浜、諸磯系）あるいは関西系（北白川下層系）と区別して呼ぶことにし、標記にあたっては前者を何Ⅰ型、後者を何Ⅱ型とする。

JCI型—北白川下層Ⅱ式及びその系統を受けて形成された型であり、後者の個体数はかなり多い。第1文様帯はその多くが羽状縄文で構成され、北白川下層Ⅱ式の搬入土器と考えられるもの以外は、2本撚2段の縄文原体を用いる。文様の効果は左右の羽状効果を取る。第2文様帯は無文地に半裁竹管あるいは二枚貝による連続爪形文を横位に附すものと、縄文地に篋状工具による横位の沈線文を数条附すものに2分される。第3文様帯には篋状工具による刻み目を附すものが認められる。

この北白川下層Ⅱ式そのもの、並びにその系列で形成された土器（爪形文を持つもの）と平行沈線を持つ地方化された土器には時期差を認めることができる。これについては後に記

すことにしたい。

J C II型古一第1文様帯にはJ C I型同様羽状縄文が施されるらしい。第2文様帯は無文地に半裁竹管あるいは篋状工具による沈線文が附される。器形にはB₁・B₂が認められるが、第3文様帯は無文となっている。

J型一第1・第2文様帯の区別が無く、器表面全てが縄文によって飾られる型である。縄文はその大部分が羽状効果を示すが、普通の斜縄文も認められる。第3文様には篋状工具あるいは指頭による刻みを附すものと無文のままのものが認められる。これも時期差を示すものと考えられる。

J R I型一この型は全て北白川下層式土器の系統を引いて成立した型と考えられる。

第1文様帯と第2文様帯の区分は隆起線文を設けるか否かできめられている。すなわち、いくつかの個体は第2文様帯まで縄文地が一たん設けられ、その後に隆起線を数条めぐらすことにより第2文様帯を形成している。他にあらかじめ第2文様帯に相当する部分を無文地とし、そこへ隆起線を設ける個体もあるが、前者が古い要素と考えられる。

隆起線には粘土紐を張りつけるものと、指頭で押し引いて作るものとの2者が認められるがこれについては後者が新しい要素と考えてきしつかえなからう。前者の隆起線上には篋状工具による刻み、棒状工具による刺突、縄文等が附されるものがある。この隆起線は多く水平に数条設けられるがジグザグにはりつける個体もある。又、隆起線が弧状に連結し、その上に2枚貝あるいは篋状工具による刻みが附される個体があるが、この個体については関西方面からの移入土器と考えられる。個体数も少ない。

この型でもっとも注意が必要な部分は、第3文様帯である。第3文様帯に2段の縄文を回転施文する個体がかかり認められる。この手法は前期第1群土器から系統が引けるもので、古い要素を示すものと考えられる。以上記してきたようにこの型は他地域の土器群の影響を受けながら成立したこの地方独自の型と考えられ、文様の各要素により、時期的な細別が可能な型といえる。

J R II型一この型は時期的には先のJ R I型の後に続く型である。粘土紐を張り付けるテクニックがもっとも盛行し、器表面のかかなりの部分にわたって弧状・うずまき状、あるいは、ジグザグに張り付けられる。この型には半裁竹管による連続爪形文を隆起線に附すいわゆる浮隆爪型土器を主体とするものと、ソーメン張りと呼ばれる種類が認められる。第1文様帯の羽状縄文は少なくなり、ソーメン張りの一群には木目状撚糸文があらわれる。一方、浮隆爪型文の第1文様帯の大部分には縄文が施文されたと考えられる。これらは2つの型に別けられる可能性が強い。

J C II型新一この型は文様構成的にはJ R II型のソーメン張りのグループと似る。第1文

様帯には木目状撚糸文が附されるが、所属時期については問題の多い型である。

第2群土器の様式的区分

J C I型が北白川下層Ⅱ式に比定できることはほぼ疑いない。J CⅡ型古は一部黒浜式類以のコンパス文を用いるが、先にあげたように、むしろ諸磯A式に比定する方が適当と考えられる。この関東的な色彩を帯びるJ CⅡ型古の占める位置は、前章で述べた、一北陸地方の前期土器群はその終末前まで、関西系の系列を強く引く—という表現に大きな問題を投げかけている。土着の土器としては、J型の内、口唇部に刻みを持つものが比定できる。一部関東的な色彩が濃い土器群の存在は認められるが、全体的には北白川下層Ⅱ式の影響を受けて成立した土器群が主体を占めるものと考えられる。このまとまりを前期第2群第1様式として把握し、北白川下層Ⅱ・諸磯A式に比定したい。

J R I型は先に記したように、関西系の系列を引いて成立した地方的な型である。文様構成並びに施文手法の違いその他の理由により、時期的に違う2群にわたって使用される。従来、蜷ヶ森式として把握されていた土器群はこの型の新しい部分にあたる。すなわち、先にも記しておいたように第3文様帯に施文するもの、隆起線をジグザグに張り付けるもの（この場合、地文には縄文が附され、隆起線が太い傾向にある）等は蜷ヶ森遺跡並びに同時期と考えられる小矢部市宮中遺跡、婦中町平岡遺跡では認めることはできず、富山市小竹貝塚・小杉町囲山遺跡等で初めて注意できた。第3文様帯に縄文を施文する手法は古いやり方（前期第1群以下）の名残りと考えることができる。そこでこの二区分の考え方を取ったわけである。蜷ヶ森の時期比定については、張り付け隆起線を持つことにより関東諸磯B式に比定する考え方〔小島1968〕と諸磯C式に比定する考え方〔高堀1965等〕がある。

小竹貝塚及び吉峰遺跡からは北白川下層Ⅲ式土器の搬入品、あるいはその直接的な影響を受けて作られたと考えられる個体が発見されている。その量は少ないが、先の蜷ヶ森式土器の標式遺跡である蜷ヶ森貝塚からは発見されていない。この点に注視して、このJ R I型の内の古い部分にその北白川下層Ⅲ式が組み入れられると判断したい。したがって従来からいわれてきた、いわゆる蜷ヶ森式土器群（J R I型の新しい部分）は諸磯C式に比定できることになる。まだ多くの問題点を持つと考えるが、ここでは暫定的に、この古い部分を諸磯B式に比定しておきたい。

このJ R I型の新しい部分とJ型並びにJ C I型の内、沈線を数条めぐらすものが組み合わせあって、1つの様式を構成すると考えられる。ここで古い部分を前期第2群第2様式新しい部分を第3様式として把握しておきたい。

J RⅡ型及びJ CⅡ型新の実体は不明確である。小島俊彰はこの2つの型が、北陸地方においては平行して併用されるとし、更に2時期に細分した上でそれぞれを福浦上層・朝日下

層式として編年づけている〔小島1968〕。この中で、手法的にも時間的な関係においてでも、もっとも特殊な位置を占めるのが朝日貝塚出土のいわゆるソーメン張りの土器群である。福浦上層式として知られる浮隆爪型文土器より後の所産であることは、木目状燃糸文と共存することにより、違いのない事実である。ソーメンの張り方は、山内清男により注意されたオ^⑮ホーツク式土器の場合同様、管からふき出すことによりなし遂げられたと考えられる〔山内1958〕。手法的には余り例を見ず、立山町吉峰遺跡に一部類例を見るだけである。筆者は、朝日貝塚に特に発達した特殊な手法と考えている。

J R II型には他に浮隆爪形文が認められるが、その編年の位置は問題がない。ただ、これにJ C II型新の一部が伴うとする小島俊彰の考えには若干の疑問がある。具体的な例証は持たないが、一応J R II型の内、浮隆爪形文を持つもの（爪形文を附さないものも含む）を第4様式、J R II型の内ソーメン張りを持つもの、J C II型新を第5様式（木目状燃糸文を持ち円筒下層D式に比定）として把握しておきたい。

以下、紐部については詳述することはできなかったが、一応の考え方を示してみた。各型については今一度再整理の必要がある。これについては後に改訂の機会を得たい。資料の明示については明確に細別して図版化することができなかったが、できるかぎりの範囲で各様式の明示を試みた。大方の批判をあおぎたい。

註①この山内編年では新保式が前期末に設定されている。これは東北地方の円筒下層D式土器群との関係で位置づけられた。

註②縄文時代各期に属す土器群の研究はその多くが、大中心地とその派及地ということを念頭に置いて実施される場合が多い。前期については、常に関東の諸磯式土器群と、関西の北白川下層式土器群がとりきざされる。いずれが優位を持つか、非常に判断しにくい、どうも北白川下層式に軍配が上がる気がする。すなわち、諸磯式土器群は北白川下層式土器群の影響下で形成された分布範囲の大きい土器群と考えたわけである。

註③型式と様式という単語はとかく対比して考えられがちであり、しかもその各々の内容あるいは概念規定になると全く統一が取られていない。利用者にとっては難物中の難物と考えられる。

これについて筆者は、型式とは一つの遺跡における土器製作手法上、同一的なレベル及び内容を持つ1群を指す単位とし（1インダストリー内の1活土器群）、様式とはその複数の型式の時間的並びに地理的関係の同時性を指す単位と考えている。これについては佐原真・小林達雄両氏の教示を得ているが、具体的なことについては別に論述の機会を得たい。

註④佐原真氏は器種という単語でこの形式に近い考えを示されている。各々の概念は細部までちりばめればかなり相違が認められるが、各単語をあつかう精神は同じものと考えたい。

註⑤山内清男博士並びに小林達雄氏の成果・記述方式〔山内1964、小林1967〕に従う。

註⑥見えざる部位を飾ることの意味には非常に大きいものが有ると考えられる。考えようによっては、文様の起源にかかわると思うが今回は一応文様帯からはずしておく。第3文様帯にも若干その傾向が認められるが、これ以上の発言は後にその機会を持ちたい。

註⑦条痕文には貝殻を使うものや串状工具を使うものが認められる。そこで工具であるKAIのK及びKUSHIのK

を記号とした。

註⑧縄文には絡状体を原体とする撚糸文を含むものとした。理由は北陸地方の前期として、各土器群を見る場合、縄文をそのような形で分離して考える必要が無いものと判断したからである。

註⑨沈文とは沈線文並びに連続爪形文・刺突文等、土器面を沈ぼつさせることによって描かれる文様の総称として採用した。この中へ押圧縄文を含めなかったのは手法の違いを重視し、効果は重視しなかったことによる。

註⑩隆起文も註⑨と同様の解釈による。ただ、深鉢形A₁・B₂の器形を取る個体には、波頂部から垂下した張り付け文が施されており、これを文様帯に含めるか否か判断に苦しむ。少なくとも帯状の効果は持っていないと認められるので、一応ここでは文様帯のわくの中には含めないこととする。

註⑪橋本1966第10図183は天神山式〔紅村1963〕に比定し得よう。

註⑫この点については佐原真氏の教示を得た。氏によると、北白川下層II式の古い部分と、II式そのものが認められるという。

註⑬この点については小林達雄氏の教示を得た。関東地方諸磯A式には一部コンパス文が残るケースがあるという。北陸地方の例も、そのケースと考えたい。又、後に述べるが、小竹貝塚では爪形文及び肋骨文とコンパス文が併用される個体が認められることもこの点を強調する点となる。

註⑭この点については湊晨氏の教示を得た。

註⑮これについては小林達雄氏との共同協議による。記して明記する。

山内清男博士はこの手法は北海道以外、内地にはないとされている〔山内1958〕。